

科目分類	専門職の教育			開講学科	医療栄養学科
科目番号	学年	配当セメスター	区分	単位数	授業時間数
13066	2	後期	必修	2	30
授業科目名 (英文)	病理学 I (病態の系統的理解) (Pathology part I)				
担当教員名	小西 敏郎				
授業の概要及び到達目標					
<p>病理学 I および II では、これまでに学んだ解剖学・生理学を統合・整理しながら、できるだけ多くの疾患の病態を理解し、医療の現場での栄養管理の実践において応用が可能になるような知識を広く会得してもらうことを目的としている。</p> <p>病理学 I (病態の系統的理解) では、解剖学の知識を基に様々な疾患における臓器・組織の変化を学び、病気の本態を理解し、病気の診断を確定するための検査などについて総合的に理解できるようにしていく。そして、身体を構成している各器官・臓器・組織が、病的状態において、その形態、機能や代謝がどのように変化していくかを学ぶ。</p>					
準備学習等					
<p>病理学 I では、まず総論的にヒトの身体の構造と機能を系統的に学ぶ。引き続き、各論では、栄養・代謝・内分泌系、消化器系、循環器系、腎・尿路系、精神・神経系、呼吸器系の疾患、血液・造血器系、骨格・運動器系、皮膚系、アレルギー・免疫系疾患などについて、基本的な病態を解剖学および生理学と結びつけて理解・修得する。解剖学・生理学の知識が十分でない病態における変化も理解できないので、病理学 I では 1 年生の前・後期に学んだ人体の構造と機能についての理解を復習しながら病理学を修得することとなる。</p> <p>①次頁に示す授業計画に沿ってテキストの該当部分を予習することが望ましい。</p> <p>②授業の最後に重要点についてミニテスト形式の宿題を出し担当学生を指名するので、次回の授業では担当学生が必ず学修結果を発表する。学生全員はこの宿題を中心に復習すること。</p>					
成績評価の方法	期末試験 70% 授業の出席状況や授業中の態度、予習・復習の様子など 30%				
テキスト	系統看護学講座 専門基礎分野 「解剖生理学 人体の構造と機能 (1)」 坂井建雄・岡田隆夫 (医学書院)				

参考図書	<p>*カラーで学べる「病理学」第4版 編集 渡辺照男 (ヌーヴェル ヒロカワ社発行)</p> <p>*栄養科学シリーズNEXT「病理学」早川欽哉・藤井雅彦編 (講談社サイエンティフィック)</p> <p>*スタンダード栄養・食物シリーズ4 「疾病の成り立ち」Ⅰ、Ⅱ (東京化学同人)</p>
備考	<p>解剖学と同様に病理学の用語は難解な言葉が多く、外国語も英語だけでなく、ドイツ語もよく用いられている。初めて耳にする疾患名の多いはずである。難解な用語については授業中に積極的に質問して、専門用語を理解し、そして疾患の病態・診断・治療を把握すること</p>
授 業 計 画	
<p>テキストに沿って解剖生理学を復習しながら、各器官系・臓器の疾患を基礎的に理解する</p> <p>第1回：解剖の基礎知識（まとめ）、消化器系の構造と機能1（口腔・食道・胃・十二指腸）</p> <p>第2回：消化器系の構造と機能2（小腸、大腸、肛門、肝臓・胆道・膵臓、腹膜）</p> <p>第3回：呼吸器系の構造と機能（気道の構造と機能、肺の構造と機能）、酸素・CO₂運搬の仕組み、呼吸性アシドーシス・アルカローシス</p> <p>第4回：血液・造血器・リンパ系 (赤血球、白血球、血小板、血漿タンパク質、凝固・線溶系)</p> <p>第5回：循環器系の構造と機能（心臓の構造と機能）</p> <p>第6回：腎・尿路系の構造と機能</p> <p>第7回：内分泌器官と機能1(ホルモンの分類・構造・作用機序、視床下部・下垂体ホルモン)</p> <p>第8回：内分泌器官と機能2 (甲状腺ホルモン、カルシウム代謝調節ホルモン、副腎皮質・髄質ホルモン)</p> <p>第9回：内分泌器官と機能3（膵島ホルモン、性腺ホルモン）</p> <p>第10回：運動器系の構造と機能 (骨・軟骨・関節・靭帯の構造と機能、骨の成長・リモデリング、筋肉の構造と機能)</p> <p>第11回：神経系の構造と機能（体性神経・自律神経・感覚神経）</p> <p>第12回：免疫・アレルギー</p> <p>第13回：生殖器系の構造と機能（男性生殖器、女性生殖器、性周期・排卵の機序）</p> <p>第14回：妊娠と分娩、生殖器の発生、胎児の循環</p> <p>第15回：感覚器官、まとめ (以上の予定ですが、変更の可能性があります)</p>	